

「遠成寺」周辺試考

三浦日脩

一、問題の所在

日隆聖人（以下日隆師と称す）の御伝記については、元禄一五年（一七〇二）に著された日寛師（光長寺二四世）の『三井德行記』が初めてである。御伝記の著述は、教義の興隆研鑽と宗門の高揚拡張とに深い関連があると考えられる。それは、江戸期に入り檀林における教義研鑽の中で台家中心の動静が続き、そうした時代の中で宗祖の教義を復興宣揚する気運が、江戸中期頃になって高められてきた。それは妙蓮寺日感師（妙蓮寺一六世・両山二一世）の録外御書の編纂事業であった。やがて祖書研纂が進められ、日成師（両山三五世）によって、天台偏重の教義、歴劫成仏義を排し、即身成仏義を鮮明にし、日行師（両山四五世）を経て日憲師（両山四五世）によって江戸期における本宗教義の整備が確立されるに至ったのである。殊に日憲師は、日隆師の三千余帖にわたる御聖教を通して、下種即成の信行觀を以て名字即の信位、唯信の一行の上に六即を論じ六即皆題目の一行に徹する信行論を展開したのである。注目すべきは日憲師以後の両山貫首の歴世は殆んどが尼崎・勸学院出身であることを見ても、勸学院の教義の動静が深く関わりを持っていることがわかる。

日隆師の御伝記は、こうした時代背景の中から著され始められたものと考えられ、教義の確認がそのまま日隆

師の御伝記の確認へと関連していったと考えられる。御伝記の中で問題として挙げられる二点について考察を加えたく、その一つは、日隆師の「遠成寺」での剃髪に関する乳母の霊夢による霊言と、乳母所持とされる「法華經」の深円への授与、二つには「遠成寺」の所在について未だ解明がなされず、僧名「深円」と応永一七年（一四一〇）日隆師が妙本寺を退出した折、美濃国に赴き、勸学院善深より「法命集」を授与されたこととの関連について考察を加えてみたい。

二、日隆師の得度剃髪の動機について

日隆師剃髪の動機について、日寛の『三井徳行記』には、応永四年（一三九七）日隆師の母益子よみこの夢枕に金色の人が現われ、嚴肅の中に自ら髪を落し、又父尚儀も老師より利剣を授かる夢を見、我が子長一丸の武将としての将来に期待の意志を抱いていた。これに対して乳母は、尚儀夫妻に対し、既に家嫡として弟直之がいること故、長一丸に出家をすすめ、自ら所持の法華經を献じ、大音声で經文を唱え、間もなく姿を消した。後にこの乳母は鬼母が姿を変えていたことがわかった（要旨）と記されている。

ここで、剃髪得度を尚儀夫妻に奨めた乳母が長一丸に「法華經」一部を贈った記載について考察したい。

『三井徳行記』（日寛著・光長寺二四世・元禄一五年）には、

則すなはち有り所持之經ヲ披テ小器ニ出シ妙經一部以テ献ジ于幼君ヲ語リ訖而放テ大光明ヲ出シ大音声ヲ唱テ曰ク我等亦当身自擁護
受持誦誦修行是經者会得安穩離諸衰患消衆毒藥ト不レ知行レ所後〔知テ是即鬼母ノ変作〕。

『開基日隆大聖人縁起』（高岡本光寺一四世嘉伝院円承日淳著・宝歴二二年二月）には

時に乳母のおほへらく、家に嫡子のみます上はゆるし給へ、われに所持の御経有り。幼君にたてまつらんといふて高声に我等亦当身自擁護受持読誦修行是經者会得安穩離諸衰患消衆毒薬と唱へてついにその行方知らず。是れ鬼子母神のへんげなる事と經文文明なり。

〔宗門第九再興正導師両山開基日隆大聖人略縁記〕（日心著・両山五八世・両山歴請写書継稿所載・寛政二年二月）
寂）には、

乳母云君已レ有家嫡ニ何ソ不レ許ニ出家ヲ而我有レ所持之經ニ可レ献テ幼君ニ披ニ小器ニ出テ妙經一部ヲ授レ之訖放ニ光明ニ出ニ大音声ヲ唱テ云我等亦当身自擁護受持読誦修行是經者会得安穩離諸衰患消衆毒薬ト。声未レ訖忽ニ不レ知行所ニ是レ鬼子母神之化現ナリ。

〔本門八品法華宗再興之大導師開基日隆大聖人募縁誌〕（日蒼・天保九年一月十三日著）には

乳母待レ旁ニ尋テ授ニ妙經八軸ヲ礼ス師ヲ乎手安ニ于机上ニ焉倏忽メ居館鳴動放テ妙經光明ヲ出テ戸外大音声ヲ曰我当常ニ身自擁護乃至修行是經行者会得安穩等蕩々乎ト唱テ去ト矣。

〔日隆大聖人徳行記〕（石濱日勇・明治二年六月二二日著）には、

乳母の尚も云葉を正し君には已に正嫡なる直之君の在せませば譬へ出家遊ばすとも抑も何の妨か之あらん。妾は法華の慧力あり今幼君へ申さんと小篋の裡より妙經八軸を取出し長一丸に授けらる。此時光明室内に輝き乳母の儀に大音声を出して我等亦当身自擁護受持読誦修行是經者会得安穩離諸衰患消衆毒薬と唱へ畢り忽然姿は消失玉ふあとに尚儀其經卷を閲檢シ玉ふに八巻の尾に法華經一部願主沙彌慧匠敬白康德二年三月八日とぞ記したりここに於て乳母の鬼子母大善神の化現にてありしこと悟りくまへん觀視この不思議を感伏。

〔日隆大聖人御一代記〕（信隆日秀著・大本山本興寺一〇〇世・大正二年三月一五日著日隆大聖人四五〇遠忌記念）に

は、

乳母は忽然会釈して、すつくと立ちて異相を示し大音声にて唱ひらく我等身自擁護受持誦誦修行是經行者会得安穩離諸衰患消衆毒藥と云ふかと思へばかき消す如く姿は消えて泡沫の跡には手箱に妙經八軸每巻口には妙道とあり奥には願主沙彌慧匠敬白康德二年二月八日相伝深円云。帙の裏に「恋しくは尋ね来てみよ法華經の八巻の奥の九名皐諦」との連歌一首あり（中略）爰に知る此の乳母こそ鬼子母尊神の御変作なり。

以上挙げた御伝記中の日隆師得度剃髮の由来については、すべて『三井德行記』が伝承され、鬼子母神の変作として乳母の奇瑞が述べられている。

こうした中で、『開祖德行記試評』が日芳師（両山六四世・文化八年著）によって、従来迄の御伝記を根本から見直す作業がすすめられ、乳母所献の妙經について指摘されている。

私云。此説可レ疑。彼経尾曰。法華經一部願主沙彌慧匠敬白康德二年三月八日已上。是師六才之年月也。然レバ本興寺彌藏之八軸ハ非ニテ嫡母所藏ニ而為ニルコト慧匠志願之妙經ニ揚焉。又曰。相伝深円云。案メルニ師入道之初相ニ伝シヒテ此経ヲ後、自ラ加ニ論釈ヲ終身ニ保惜メ之、而留メ在キ夫寄ノ本山一者也。

と記され、深円に相伝された時期は、深円という僧名を授受された後である事がわかる。然し日芳師の説は世に再考されることなく、文政一〇年（一八二七）、淡州下田坊の諦苗日寛師の書写本には、

予未レ得テ茲書ヲ幸ニ今年拜ニ閱之テ依為ニ修学一一助ニ耶カ勞シ筆ヲ而拜写スル焉于時ニ文政十丁亥年春二月日。

とあり、又、文政四年（一八二二）智亮日狂師の写本もあるがいずれも流布をみることはなかった。日隆師の得度剃髮についての御伝記作成については乳母を登場させることにより、相伝深円として格護されている法華經一部とを関連させ、一連の奇瑞として結びつけ、乳母を鬼子母神の変作として結びつけたと考えられ

る。因みに、日隆師の母益子は日隆師十三才、応永四年（一三九七）に歿している。

三、「遠成寺」での得度剃髪と師について

日隆師の得度剃髪については『三井德行記』に示されている越中國にあった「遠成寺」に赴き、慶寿院を師として得度された説が伝承されている。然し越中國での遠成寺の所在は不明であり、宗旨も定かではない。久遠実成の意から天台宗であったと推察されている。

ここで御伝記類に伝承の形態をみると、『三井德行記』には、

於是師辞「舊里一人同國遠成寺」師トシテ慶寿院「奉持三宝」。同年ニ以五月十日辰刻「除縁髮染濁」紅神ヲ為「沙門之形」名ヲ深円ト

とあり、『開基日隆聖人縁起』には、

時爾明德四年五月沙門の形となり同國遠成寺慶寿院越師登した三宝に奉事給御名越深円と云う。

『宗門第九再興正導師両山開基日隆大聖人略縁起』には、

同國人「遠成寺」師トシテ於慶寿院「寄会、同年五月十日剃髮染衣成」沙門之形「名ヲ曰「深円日立」后改慶林房日隆。『本門八品法華宗再興之大導師開基日隆大聖人募縁誌』には、

明德四年四月登ニ于山「奉持ニ三宝未越ニ於二句」通ニ誦ニ法華八軸「以ニ夏五月十日辰刻」剃於髮染ニ濁「於紅袖」而成「沙彌貌」名ヲ曰「日立字「深円」後自ラ改ム日隆。

『日隆聖人德行記』には、

同國なる遠成寺に投じ住職慶寿院を師とし事へし（中略）今茲に五月十日剃髮得度し濁衣を脱て浄衣に更え御名を深田と改め玉ひ。

『日隆大聖人御一代記』には、

道交深き遠成寺の慶寿院上人が許へ即日入寺の式を挙げ二句の内に妙經通誦五月十日に剃髮得度し浄衣に着替へ深田と尊神授受の御経に記せて御名其儘に改め給う。

以上遠成寺の所在を「同國」と記載されている点は全ての御伝記が共通であり、師を慶寿院とする点も同じである。信隆日秀師は、尚儀と慶寿院を「道交深き」と会通している。日隆師の得度剃髮の地を考えると、曾祖父桃井直常の活躍した美濃や飛騨を中心とした桃井家一族の時代背景の中から、この問題を考えてみたい。

四、桃井直常と姉小路家綱

桃井家が歴史上に登場するのは直常からである。

元弘三年（一一三三）、後醍醐天皇は北条幕府討伐を開始、新田義貞軍に呼応して建武の中興が成立した。しかし足利尊氏は朝廷に反旗を翻し南北朝時代に入る。この対立の中で桃井直常は後醍醐天皇を擁護する南朝側についた。直常は高師直の推挙により兵を挙げ、北畠顕家の軍を破り歴応元年（一一四〇）五月二七日、若狭國の守護職につき、越中の守護職には歴応五年（一一四四）十一月の就任で在任期間は正平六年（一一五一）三月迄の六年間である。この間に尊氏は正平四年、弟直義と対立し、直常は直義に味方して越中で挙兵し軍功をたてた。しかし尊氏と直義の和睦が決裂し戦鬪が激化、直義は毒殺された。直常は奮闘したが後退、後醍醐天皇は吉野に

戻り、尊氏の直常追討の戦いが本格化した中で、正平一〇年（二三五五）一月一六日、直常は弟直信と共に入京し、尊氏は同一三年四月一三日に歿した。⁽¹⁾

その後正平一七年（二三六二）一月、直常の子直和が越中で挙兵、直常も信濃門尾城より戦鬪に参加、守護職斯波高経の守護代、鹿草出羽守を攻め東部越中を支配した。しかし直常の井口城を唯一人で訪れる一瞬の油断で形成は逆転、弟直弘が幕府軍に降伏した。⁽²⁾

正平二一年（一三六六）には斯波高経、義将親子が足利義詮と対立し失脚、直常の弟直信が越中守護職となった。⁽³⁾ 在任期間は翌二三年迄の短期間であったが、これは同二二年二月七日に義詮が歿したからで、後継者は当時一〇才の義満であった。これを機に直常は挙兵し、義将の軍と戦ったが敗れ義将が守護職となつて勢力を拡大し、建徳元年（一三七〇）再び桃井掃伐を始め、この年四月二二日直和は戦死した。⁽⁴⁾

直常は松倉城に撤退した後、飛驒に脱出し、飛驒國司の姉小路家綱の庇護を受けた。翌建徳二年（一三七二）七月、直常は家綱の兵と共に越中に戻り、石動山天平寺の衆徒と共に斯波義将の軍勢を攻めたが、五位荘の戦いに敗北、その後の消息について幾つかの記録が残されている。例えば正平二一年（一三六六）九月、斯波義将が直常を追討するが、越中に到つて直常病死の報に接する。又正平二四年（一三六九）、直常は京より越中に戻つて挙兵し松倉城を落とすが、足利義満が度々追討し落城討死する。次には天授六年（一三八〇）六月岩瀬城に籠城し、妻子を海に沈めた上で自害した。更に文中三年（一三七四）斯波氏頼に攻められ松倉城にて自害した。そして五位荘の戦いで戦死したとの諸説が残されている。⁽⁵⁾

ここで直常が飛驒國司の姉小路家綱の庇護を受けた資料が見える。『花宮三代記』に、
直常合戦、両方討死手負数千人、後位荘二戦フ。飛驒國司舍弟二名以下百余人降参生捕リトナル。

と記されている。この『花宮三代記』は、室町幕府の日記（記録）帳で、応永三三年迄の記録である。姉小路家は「藤原北家、小一条流」と称せられ、京都姉小路に居住していたことで、これを家系とし師尹の子濟時の時から用いられたと云われる。系譜は、

師尹—濟時—師成—師李—尹綱—親綱—家時—頼基—師平—家綱（飛驒國司）—昌家（姉小路）—基綱—濟繼—濟俊—秀綱⁶

とあつて、公郷として登場するのは初代師尹の天慶八年（九四五）で、従四位上兼備前守としての位階が記されている。師尹は康保五年（九六九）に歿しているが、その地位は右大臣正二位である。家時は正三位で文永五年歿、頼基は従三位で出家して恐行と号し、師平は右大臣従一位関白となつてゐる。出家して禪里と号し元中七年（一二三九〇）歿。家綱は、永和七年（一二七八）従三位に叙せられ、翌年参議に任ぜられ、元中七年（一二三九〇）歿。家綱が飛驒の國司に任ぜられたのは「建武の中興」からで、飛驒の小島城に在つた。國司は地方諸國の政務を行うもので、「守」（行政・警察）、「介」（守りの補佐と代行）、「掾」（國內の非違を正す）、「目」（上命によつて作成した文書の審査）、「史生」（書記と雑務）の五部門に分れてゐる。任期は四年乃至六年で中央の上流階級から選出された。しかし当初の制度から次第に遙任、つまり本人は京都に止まり役職だけを受ける風習がおこり、やがて平安時代中期頃からは、地方の豪族が台頭し、地方の勢力が強くなり、國司の守護化が進められた。しかし、この飛驒では國司の権力が強く保たれ制度として確立してゐたと云われ、伊勢や土佐に於ても強い支配がなされたと云われている。

直常が姉小路家綱の許に参じたのは、建徳元年（一二三七〇）で、日隆師誕生の一五年前に當る。直常の歿年は諸説あるが、その終焉の地が越中である事は確認できる。

その一つは直常の建立と云われる興國寺の存在である。本堂東側に直常の墓と云われる宝篋印塔があり、周囲には直常の弟直弘、その子直和、孫の尚儀と妻益子、家臣相森半兵衛の墓があり、本堂には直常、直和、直常の妻の位牌も祀られている。

又、直常の祈願所と云われる龍高寺にも直常の墓と云われる五輪塔があり、直常の居城と伝えられる津毛城址近く牧野地区にある直常の菩提寺と称する東漸寺があり、その門前の水田に直常の墓と云われる五輪塔六基がある。その外にも牧野の地一瀬には直常の側室の館跡がある。

こうしてみると、直常の越中でその終焉を迎えた事は確実とみられ、孫の尚儀もこの地に在った事もわかる。日隆師の母益子は斯波義将の女と云われている。桃井と斯波の両家は幾多の戦さを交えている。

正平一〇年（一三五三）、直幸は斯波氏頼と共に尊氏を攻め近江に敗走させ、共に後醍醐天皇を奉じたが、翌年氏頼の子高経が尊氏の軍に敗れ、それ以後桃井家と斯波家は断絶したのである。度重なる戦闘がくり返される中で、天授六年（一三七九）斯波義将が管領となった。南北朝対立の中で、高経以後敵対関係を続けてきた桃井と斯波の両家は、当初に於ては共に南朝を支えた間柄にあつた事を考えると、義将の管領就任を機に、桃井家との和睦が実現し、尚儀と益子が結ばれた事が考えられる。

五、美濃下宮談義所と善深

応永二年（一四〇五）二月四日、妙本寺第四世日霽師が遷化、具覚月明師が第五世を継承した。当時の妙本寺は、天台の無作本覚思想の影響をうけ、本迹一致迹面本裏の教義に偏重していたことから、宗祖の本義本勝

迹劣、本門八品流通正意の教義と対立し、日隆師は日存師、日道師と共に妙本寺を退出した。

応永一七年（一四一〇）四月には越後本成寺に日道師・日隆師が、六月には日存師・日道師が、一二月には日道師が日陣師を訪ねている。この間に於ける日隆師の研鑽は、日存師と日道師より、本門八品正意の教義を余す所なく指南された時期であったと考えられる。そして応永二二年（一四一五）、日隆師は美濃下宮談義所を訪れたのである。下宮談義所は美濃安八郡下宮村に在った。現在の寺名は密厳寺を公称しているが「勸学院」の名前は今も通用している。

ここで日隆師は勸学院法印の善深師より、『法命集』を授与されている。

応永廿二年^{乙未}九月十二日、於濃州安八郡平野莊北方保下宮勸学院法印善深教授深円^{了花押}。

とあり、日隆師三二才の時であった。安八郡は、神戸町、北平野、南平野、下宮等が含まれており、平野莊の奥に北方がありその地をさらに開墾した所を「保」と云った。平野莊は揖斐川に近く日吉神社の別当寺院として上宮（善学院）と下宮（勸学院）とが存在していた。

『法命集』の撰者は天台宗の学僧松林房心賀師の説もあるが定かでない。嘉慶二年（一三八八）、「柏原談義所を開いた貞舜師（二三五三〜一四二二）に伝えられた。貞舜師は比叡山の宝圓院より柏原に来て談義所を開いた中興開山である。貞舜師と日隆師とは三二才の年令差があるが、日隆師の著書『名国見聞』に貞舜の『七帖見聞』に触れている部分があり、この事から日隆師は貞舜に学んだと考えられ、殊に宗派を超えて所化の来衆を認めていた「柏原談義所」は開放的であったと云われ、美濃の「下宮談義所」にも大きな影響を与えた。⁽⁸⁾

美濃には多くの談義所があり、「垂井談義所」、「府中談義所」、「興福寺談義所」、「中川談義所」、「弓削談義所」、「深瀬談義所」等があった。又天台宗寺院も多く、大垣に円興寺（八一五創立）、神護寺（七九〇創立）、揖斐郡谷

汲村に横蔵寺（八〇一創立）、可児郡御嵩に願興寺（八一五創立）、禪護寺（善学院八一七創立）、密厳寺（勸学院八一七創立）等があり、いづれも伝教大師の創建と云われている。

「下宮談義所」を訪れた日隆師に対し、勸学法印善深師が『法命集』を授与された背景について考えてみたい。『法命集』の内容は天台三大部の法華経解釈について『法華文句』を基とした「経旨」、『法華玄義』を基にした「教旨」、『摩訶止観』を基にした「宗旨」の三編から成っている。得度剃髪以来一八年間、応永九年妙本寺日霽師の門に入る迄の間に日隆師は「下宮談義所」で研鑽を積んだのではないだろうか。天台教学を深める中で「法華経」の本質を究めようと上洛し、妙本寺の門に投じ、日存師、日道師の許での研鑽が続けられた。そして日陣師を越後の本成寺に訪ねた中で、法華経の奥義が、滅後を正意とする本門八品上行所伝に在る事を確信し、一字建立の決意を抱き、「下宮談義所」の善深を訪ねたのではないか。応永二二年（一四一五）、京都は高辻油小路と五条坊門との間に「本成寺」を建立した。

この事から日隆師の得度剃髪の寺は「遠成寺」ではなく、「下宮談義所勸学院」であり、師の慶寿院ではなく、勸学法印善深ではなかったと考えられる。善深師とは応永九年上洛以来一二年目の再会であった。その目的のための訪問に他ならなかったと考えられる。

又、日隆師所持の「法華経」については、小西日遠（徹龍）師が、先に挙げた日芳師の『開祖德行記試評』を更に論を深め、『日隆聖人略伝』の中で、

そして卷八の末尾に「相伝深円（深円は隆師の所化名）と隆師の署名があることから、この法華経が何らかの縁で深円すなわち隆師の所持本となったのである。さらに注意すれば、法華経卷三の卷末に、前の「慧匠」とは異筆で「応永二十年十一月二十六日」と日付のみ書き込んである。¹⁰⁾

と解説されている。この文中の「何かの縁で深田すなわち隆師の所持本となったのである。」の文と、「出家後の応永年間に手に入れられたものであらう。」と述べられている点について考えてみると、所持されている法華経には全体に亘って多くの傍註が施され、永年に亘る研究作業の理解度を示す標示であることが判る。この事は短期間で記載された傍註ではなく、「何かの縁」として考えられることは、日隆師が得度剃髪し、「下宮談義所勸学院」で善深師より授与された法華経であり、それ以来日隆師の所持経本として手元に置かれたのではないかと考える。

又、異筆の「応永二十年十一月廿六日」の日付けの書き込みについては、この年六月二五日、妙本寺は比叡山の衆徒により破却され、月明は若狭小浜に避難している。しかしこの年に月明は一旦妙本寺に戻っているが、翌年の春に再び比叡山の衆徒は妙本寺を襲い堂塔破却、月明は再び若狭小浜に難を避けた。こうした妙本寺の動静の中で、一〇月二五日日存師と日道師が妙本寺に対し起請文を書いたと云う偽書が妙頭寺に現存していることを考えると、応永二〇年から二一年にかけて、日存師、日道師、日隆師、三師と妙本寺との間で複雑な動きがあった事が、この日付の記載の裏側に存在するのではなからうか。

以上、隆師の御伝記中に見える、得度剃髪に関わる乳母の法華経授与の記述と、未だ所在不明の「遠成寺」と、師の慶寿院師について、桃井家の歴史的側面から試考したものである。

註

(1) 『南北朝の動乱と桃井直常』(富山県立富山南高等学校地歴部・平成五年)

- (2) 「桃井と斯波」(松本日宗師・昭和三七桂林同学会資料より)
- (3) 「南北朝の動乱と桃井直常」より
- (4) 「花營三代記」
- (5) 「南北朝の動乱と桃井直常」の中で「越中史徴」、「喚起泉達録」、「武家系図」、「太平記理尽鈔」等の諸説をあげている。
- (6) 「姓氏家系大辞典」
- (7) 「法華宗年表」
- (8) 「法命集」について(尾上寛仲師・「叡山学報二三号・昭和五六年)
- (9) 「信濃の天台宗 義所」(尾上寛仲師・「信濃」十一・十二合併号・信濃史学会・昭和三五年)
- (10) 「日隆聖人略伝」(小西徹龍(日邊)師・昭和六〇年)